

TOPIC

## 「FMU Community Garden」開催報告



令和7年7月4日、本学光が丘キャンパスにて、医学部学生主催の交流イベント「FMU Community Garden」が初めて開催されました。

本イベントは、医学部4年生の渡部蒼依さんと3年生の常盤詩織さんが、「学年や専門分野の垣根を越えて、先生や仲間と気軽に対話できる場を作りたい」という思いから企画したものです。学生による主体的な企画に、有志の教員が協力することで開催が実現しました。

当日は学生と教員、合わせて約50名が参加しました。イベントでは、まず医学部学生3

名が登場し、それぞれプレゼンテーションを実施。その後は軽食を片手に、リラックスした雰囲気の中で少人数のグループに分かれ、自由な対話を楽しみました。

このイベントは、学生にとっては多様なキャリアを持つ教員との対話を通じて、将来のロールモデルを見つける貴重な機会となりました。また、教員にとっても、学生が抱く考えや大学への期待を直接知ることができる有意義な場となりました。

本学では、今後も学生の主体的な活動を支援し、豊かな人間性と広い視野を備えた医療人の育成に努めてまいります。

## 学生と教員の新たな交流の場

一歩を踏み出す  
きっかけがここに  
活動を続けて、  
福島医大の魅力の一つに!

### 学生プレゼンテーション

- 山村桃花さん(3年生)  
「MD-PhD(研究医養成コース)での経験、災害後の二次的健康影響に関する研究」
- 大橋由生さん(4年生)  
「PR活動、学外イベント運営」
- 瀧本敬慎さん(6年生)  
「USMLE(米国医師資格試験)、国際保健への挑戦」

詳細は、  
こちらからご覧ください



## REPORT

### グローバルな学びで視野を広げる～医学部留学生交流発表会を開催

本学医学部では、国際交流センターが主催する協定校への海外派遣学生の交流発表会を2回開催しました。

第1回は令和7年6月30日に開催され、シンガポール国立大学で4週間にわたる臨床実習を修了した医学部4年生2名による発表が行われました。

発表では、同大学の統合カリキュラムや転授業の取り組み、外科での臨床実習の様子に加え、女性医師が働きやすい職場環境づくりに関する情報が紹介されました。

第2回は令和7年7月22日に開催され、

マウントサイナイ医科大学と国立台湾大学へそれぞれ4週間留学した医学部6年生4名と、マウントサイナイ医科大学から丁度本学へ短期留学中の2名がその成果を発表しました。

発表と討議はすべて英語で行われ、台湾の救急医療体制や在宅医療、ニューヨークの多文化医療現場での経験、福島での小児甲状腺がんに関する研究などが発表されました。

これらの発表会は、学生の国際交流への関心を高め、グローバルな学習環境の提供と多様な価値観の理解を推進することを目的としています。



写真上段は1回目、下段は2回目の発表者と参加者の集合写真



## 坪倉正治主任教授が「第20回 科学ジャーナリスト賞 特別賞」を受賞しました

本学、医学部放射線健康管理学講座の坪倉正治主任教授が、日本科学技術ジャーナリスト会議が主催する「第20回 科学ジャーナリスト賞」において特別賞を受賞し、2025年7月5日に東京都内で開催された贈呈式に出席しました。

この度の受賞は、坪倉教授が福島民友新聞で長期にわたり連載している「坪倉先生の放射線教室」の功績が評価されたものです。この連載は、2011年の東京電力福島第1原発事故を受け、2015年1月から週1回のペースで始まり、掲載回数は540回を超えています。放射線の基礎知識や被ばくの状態について、

県民の不安に寄り添い、短い記事で分かりやすく解説を続けている点が評価されました。今回の受賞において、新聞分野からの選出は唯一でした。

贈呈式は7月5日、東京・内幸町の日本プレスセンタービルで行われました。選考委員であるノーベル化学賞受賞者の白川英樹筑波大学名誉教授から坪倉教授へトロフィーが手渡されました。

受賞に際し、坪倉教授は次のように謝辞を述べました。「福島県民の皆様定期的に放射線の基礎知識を提供してきました。連載を通して知識が少しずつ広がってほしいと考え

ています」

本学は、今後も坪倉教授の活動をはじめとして、県民の皆様健康と安心に貢献するための情報発信と研究活動に努めてまいります。



写真左から、坪倉正治 主任教授 白川英樹 筑波大学名誉教授



### Report

## IAEA技術協力研修員の受入～国際連携で進む核医学人材育成

福島県立医科大学は、国際原子力機関（IAEA）からの照会を受け、シンガポール総合病院（SGH）核医学・分子イメージング部門の医学物理士、Tay Young Soon（タイ・ヤンソン）氏を、5月26日から6月6日までの2週間にわたり受け入れました。

ヤン氏は、福島県立医科大学滞在中、先端臨床研究センターの中型サイクロトロンを用いたアスタチン211の製造工程や、 $^{211}\text{At}$  MABG、 $^{211}\text{At}$  PSMAといった治療用放射性医薬品の合成工程を視察しました。また、内部被ばく線量測定に関するワークショップに参加し、OpenDoseを用いた線量計算を実践したほか、大学院生による線量評価ソフトウェア（MIM、Hermes、Torch）のデモンストレー

ションを見学しました。さらに、附属病院の核医学治療病棟も見学し、核医学治療の臨床現場や、131I治療、ルタテラ治療における患者の入退室基準について理解を深めました。

これらに加え、医学部の原子力災害応急処置コースの実習にも参加し、放射能汚染された負傷者への対応訓練を体験しました。これは、核医学治療での緊急時対応にも通じる貴重な経験となったと述べています。

ヤン氏によると、シンガポールではPSMA製剤を用いた前立腺がん治療などが日本より進んでいる一方で、治療薬のほとんどを輸入に頼っているのが現状です。特に、アルファ線を放出するアクチニウム225 ( $^{225}\text{Ac}$ ) のような核種は入手が極めて困難で、治療経験を積

んだり、取り扱いを学んだりする機会が少ないことが課題であるとのことでした。

今回の研修で得られたアルファ線放出核種に関する知識、被ばく線量評価や安全管理の経験が、ヤン氏の帰国後の臨床業務の向上に大きく貢献することが期待されます。



写真前列中央に Tay Young Soon (タイ・ヤンソン) 氏



### Report

## 本学の門馬智之先生、医師を志す高校生にがん医療の最前線を講義

福島県教育委員会主催のふくしまの未来を医療で担う夢応援事業「メディカルセミナー【医学】」が、令和7年7月19日に本学で開催されました。

本セミナーは、医師を志す県内の高校2年生約50人を対象に、医学や地域医療への関心を高めることを目的としています。

当日は、本学の消化管外科、遺伝診療部、先端的低侵襲手術センターで部長を務める門馬智之先生が、「遺伝から最先端手術まで～がん

医療の進化～」と題した特別講義を行いました。

門馬先生は、がんは遺伝子の異常によって引き起こされる病気であることを解説し、遺伝情報に基づく個別化治療や、近年急速に普及しているロボット支援手術の進歩を紹介しました。

参加した高校生たちは、未来の医療を担う者として熱心に聴講。講義後の医大生との座談会でも活発な意見が交わされ、福島の医療の未来を担う人材育成に資する有意義なセミナーとなりました。



特別講義を行う門馬智之先生